



明日はどっちだ！メイカーフェアの可能性

山形 浩生

この8月にMaker Faire Tokyo 2018が開催された。東京を中心に日本各地、一部はアジアからの出展者が、作ったものを見せ合う大会だ。世界各地で開催されていて、エレクトロニクスやロボットなど、裁縫や作物栽培、料理その他、物理的にモノを作ればなんでも歓迎の大イベントだ。趣味の工作の延長的なものかなりの部分を占める、とはいえ趣味を侮つてはいけない。夏休みの工作レベルから、趣味のレベルを超越したマニアックな代物まで、本当になんでもござれ。

ここ数年で、各地でこのイベントの知名度が上がるにつれて、IoTの興隆に伴う電子ガジェットブームもあり、一部の地域ではこのイベントが、新興企業の製品紹介大会になったりもしている。だが東京は、出展者のレベルが高い一方で、そこから出てくる製品などが少ないとされる。ある意味これは、日本のおくゆかしさのあらわれなのかもしれないが、一方で日本企業の欲のなさや冒険心のなさを示すものでもありそうだ。

これとは対照的に、中国のメイカーフェアに出展したある日本人は即座に、「そいつをウチで製品化しないか」と現地企業からアプローチされたそうだ。実はそうした新製品開発支援を仕事にしている現地中小メーカーも多い。ちよつと、日本でコミケやファン出版で商売をしている印刷業者がそこそこいるのと同様だ。が、それだけではない。

いまだに中国の製造業は技術レベルが低いと思つている人も多い。だがここ20年にわたり世界の工

場として活動してきた実績は、いまや着実に質の向上をもたららし、さらにはオリジナルな製品も続々と創り出しつつある。香港に隣接した中国都市の深圳が驚異の発展を遂げ、いまやハードウェアのシリコンバレーとまで言われる。その発展の多くは、少しでも売れ筋のものに、多くのコピーと改良が繰り返され、共有モジュールの組み合わせにより新規開発の期間と費用が激減する仕組みによる。だが同時に、競争の中で少しでも独自性と新規性を打ち出すために、こうした地道なネタ探し活動も行われているわけだ。

もちろん新しいネタ探しにラスベガスのコンシューマー・エレクトロニクス・ショー（CES）などに出かけるのもいい。でもそこでは、すでに参入余地の限られた情報しかわからない。それを追いかけても、中小企業がリードを取るのは困難だろう。それより、今後芽が出そうなものや尖つたものをメイカーフェアなどで拾ってきたほうが、将来大化けする可能性はずつと高い。残念ながら本稿が出る頃には、今回のMaker Faire Tokyoは終わっている。でもメイカーフェアは、どの月でも世界のどこかで開催されているイベントだ。その気があれば、いつでも出かけられる。残念ながら今後、日本の経済は2019年の消費税率引き上げに伴い、かなりの悪化が懸念される。その前に、今からでも新しいタマ探しを始めておいて、決して損はないと思つただが……。



山形 浩生 (やまがた ひろお)

評論家・翻訳家

1964年東京生まれ。東京大学工学系研究科都市工学科修士課程、マサチューセッツ工科大学不動産センター修士課程修了。大手調査会社に勤務する一方で、科学、文化、経済、コンピュータなどの幅広い分野で翻訳・執筆活動を行っている。著書・翻訳書多数。